



1991 年 (平成 3 年)

5 月号 (No. 552)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

- ヒマラヤドライブ 9000 キロ
.....村山雅美... (1)
- 海外の山..... (2)
- 「会議の後に何をやるのか」
山の気象研究会々長大井正一氏に
秩父宮記念学術賞受賞... (3)
- 追悼 跡部昌三 (本名昌三郎) 氏... (4)
- 東西南北..... (4)
- 「蘇る山・営名連峰」「11 月の山日記」
図書紹介..... (5)
- 「鳥学を支えた岳人」「北アルプスの
こなししかた」「ヒマラヤを駆け
抜けた男」「山歩き讃歌」「関東周
辺山と地酒の旅」「富士山はなぜ
そこにあるのか」「飛驒の山々 ヤ
ブ山編」
- 自然保護随想..... (7)
- 報 告..... (9)
- 「第 7 回国際低酸素シンポジウム」
「自然保護委・秩父自然観察山行」
「91 年八方尾根スキー集会」「三水
会現地集会」「小原勝郎さんを偲
ぶ会」
- 会務報告..... (12)
- 3 月理事会、ルーム日誌、タンポ
チェ僧院再建協力募金者ご芳名、
新入会員 (復活)、住所・住居表示
変更
お知らせ..... (13)

ヒマラヤドライブ 9000 キロ

村山 雅 美

「千山万岳高きを競い」、「雲に嘯く
槍穂高」と校歌、寮歌に歌った学校は
今はない。その松本高校山岳部 OB、
わらち会が見果てぬ夢をと四輪駆動車
(ビッグホーン) で「わらちビッグ
ホーンヒマラヤドライブ (W B H
D)」を試みた。悲しいかな暇はある
が、体力に自信なしと若手を助っ人に
会員三人を含む八人が三台の車でカル
カタを後にしたのは一九九〇年九月
下旬モンズン明けの頃だった。イン
パールからレエまでアッサム・シッキ
ム (ネパール)・ガルワル・パンジャ
ブ・カシミールを東から西への原案の
両端はインド政府の許可おらず、政情

と湾岸紛争のあおりの危惧はあったが
インドからネパール西藏に入り、夢に
も見た山々を南と北から見てやろうと
走行一万六千六十日の旅である。

広大なインド亜大陸を北西に二〇〇
〇キ走り漸く山岳地域、懐が深いイン
ドは山越え谷わたる長道中となる。英
国統治下からの四通八達の星をみせる
道路は今は庶民の生活の場、あらゆる
インドが通行、横断、雑居し混乱と猥
雑の坩堝に仰天した。トラック、バス、
リキシャ、聖牛、人、物売りに埋まり
砂塵もうもの道には車軸折損による
脱輪車は数知れず、横転・転落・激突、
放火された車を不気味に眺めて先を急

ぐ。
ブレーキより警笛が重要といわれる
が大型車には「PLEASE HORN」
と大書されている。エアホーンに付け
替えてきた車はそ
の使い過ぎと連日
の埃でかすれ声と
なり用立たずが全
行程中の唯一の事
故となった。各地
に頻発する動乱に
対処する Curlew
(外出禁止令) を
避け燃料にありつ
く不測の事態に悩
んだ。朝飯抜き昼
飯は路上の茶店で
チャパティと玉ネ
ギに紅茶で走りに
走る四〇〇〇キロ、



路のため予想外に走り易い。昔懐しい
マイニタル、アルモラのヒルステシヨ
ンは今はダージリン同様人また人、建
物は薄汚れその面影なく失望したが、

険路ながら軍用道

飯らしいものにあ
りついたのは深
夜の宿だった、
朝は三時 出発し
Curlew を避けて
は燃料を積み何と
か山地に入る。
山岳道は難路

お知らせテロ電話
3234 六六五九

ナンダコート、ナンダデビー、トリスル、チャウカンバ等ガルワルの雄峰を眺めたカクサニで漸く溜飲を下げた。

針路をSW、ヒマラヤの主稜は北に遠のく。バンジャブ・ヒマラヤ地域に入るや治安はさらに怪しくなった。軍用のタンクローリーが行きかう標高四二六七呎のロタン峠を越えればレエ經由パキスタン国境への要路、河床の柳が美しく高地のようだ。雪山を背に馬鈴薯の収穫に賑わうキイロン、シシュは美人の里と見た。マナリで温泉を浴び「Mt. Shiva EXP」のTシャツを着ていた私は呼び止められた。誰あろう一九八三年ナンダデビーのチャド少佐、当時の仲間を懐かしむ彼の家招かれ楽しい時を過ごした。チャド現大佐はノープロブレムと胸を叩いたが、依然「Curfew」と燃料に悩まされながらもほぼ予定通り三十日目、六五〇〇呎を走破してインドを離れる時を迎えた。

ネパール入りは釈迦生誕地ルンビニの荘厳な落日で迎えた。ポカラへの途次、スリナガルからのドウラギリ、アンナプルナ、マナスル、ガネッシュ、ランタン、シシヤバンマの眺めの前にはインドの眺望は昼行灯に等しかった。緑豊かなネパールの風物にインドの緊張はときほぐされ、カトマンズでは距離計は七〇〇〇呎を示していた。エベレストビューホテルへはドライプ

海外の山

会議の後に何をするのか。

三月の終わり、インド北部カシミールのヒマラヤ山中で、雪面が油とすずにまみれているのが発見された。

ジャムカシミール州政府関係者は、キューートで炎上している油井のすがすが、はるかヒマラヤ山麓に運ばれたのではないかと語った。湾岸戦争が聖なるヒマラヤの雪を汚した、というわけである。

地球から「極地」というものが、消えようとしている。それが、この報道を知っての実感である。既に北極や南極で冒険的な旅を実践した探検家たちが、フロンガスの増大で大気圏のオゾン層の破壊を報告している。

戦争の巻き添えで、山が汚されるのでは打つ手はないが、登山行為自体が山を汚染してきたとしたら、やるべきことはいくらでもある。

ヒマラヤ登山で「ごみ問題」がクローズアップされてから、かれこれ二十年近くになる。

エベレストが、最初に槍玉に上がった。一九七三年イタリアのモンチーノ隊は、ヘリコプターを荷上げに使うという思い切った作戦をとったが、そのヘリコプターがクンブ氷河に墜落、機体は少しずつ青氷のビルディングに飲み込まれるまで、その姿をさらすことになった。

八千呎ラインのサウスコルでは、使い棄てた酸素ボンベの山が問題となり、ベースキャンプでは、トイレをはじめ、それこそありとあらゆる遺留品の蓄積が非難された。

「エベレストを当分登山禁止にしよう」と初登頂者の

ヒラリーは提唱（ただし、息子がエベレストに登頂した時は非難声明はださなかったが）、ゴミ清掃を目的とするエベレスト登山隊まで結成された。

国際山岳連盟（UIAA）が創立五十年を記念して「人間の登山活動による自然破壊を防ごう」という趣旨のカトマンズ宣言を発表したのは一九八二年だった。ヒラリーの呼びかけで「HIMALAYAN ADVENTURE TRUST（略称HAT）」という組織が発足したのは一九八九年である。

この十一月九、十の二日間、そのヒラリーはじめ、ボニントン（英）、エルゾグ（仏）、メスナー（伊）など各国の登山家を集めて、「HATJー自然保護東京国際会議」が開かれる。

既にこの会報で何度かふれられているように、日本の登山界、具体的に言えば、日本山岳協会、日本ヒマラヤ協会、日本勤労者山岳連盟、日本山岳会が中心となり、「本気のヒマラヤ環境保護」をやるうとする初めての試みである。

無論、自然保護は、ヒマラヤだけにとどまらない。が、一度でもその地を見た私達の誰もが、どんな言葉の形容でも表現しきれない、あの荘厳な世界の価値を知っている。

おそらく、多くの岳人が、この「国際会議」の開催に共感するだろう。企業やマスメディアも、おそらく本能的な時代感覚から、このタイムリーなプロジェクトを支援するだろう。

しかし、問題は、「会議以後」ではないか。会議は成功する、と思う。が、それからどうするのか。一人一人がそれをつきつけられるだろう。

（江本嘉伸）

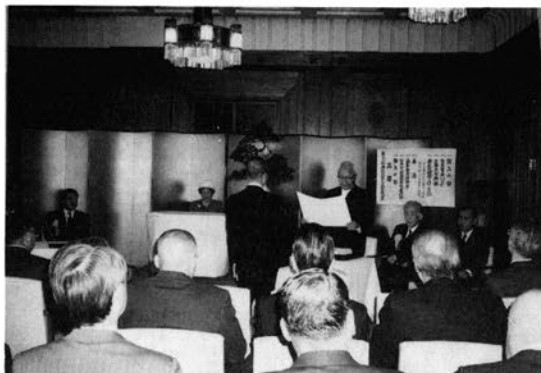
を煙管^{きせり}して空路。針葉高木林と芝地に囲まれたホテルの窓に迫る巨峰を居ながらにして楽しめる宮原君の卓見に改めて敬意を表した。

西蔵高原の旅はWBHDの終盤である。しかし道路決壊とカルネ無効のため国境の町樟木^{チヤウキ}で中国国際体育旅遊公司差し回しの車に乗り替えた。ヒマラヤの稜線を境にエベレスト南面とは僅か一〇〇キロの隔たりながら余りにも対称的に緩やかな地形、荒涼乾燥の高原となった。ラマの祈りの場に無数の旛^{フナ}が風になびく五一五〇呎のラルン峠に達し声をのんだ。四五キロの彼方にはシヤパンマを盟主とする大パノラマが展開された。

農耕車が砂煙をあげて上ってきた。枯木をひいて道の洗濯板を直す心憎い配慮は軍用とはいえず道は一〇〇キロ走行を許す中国である。海拔四四〇〇呎幅二〇キロはあろう河床に突如現れた定日招待所のツアンバとバタ茶は西蔵の味。日喀則^{シカズ}からロンブクへの五二〇〇呎のバン峠、眼前五十キロに展開した八〇〇〇呎の峰々に度肝を抜かれた我々は西進してシヤパンマのBCへとシリグへ向かった。ヤク・ヒツジがのどかに草を喰み水面は凍りに輝き、茶一色の西蔵高原の果てにはシヤパンマからランタンリルンに至る山なみが銀屏風のようにガネパール境に立て廻

らされていた。

十四座の内四座を除き全ての八〇〇〇呎の眺望を欲しいままにした我々は総行程九八〇〇キロ、五十六日目に爽かな秋の気配が漂っていたカルカッタに帰着した。いすずの厚意による車の費用を除き各人約八十万円を負担した旅は所詮年寄りの暇潰しであり剩えヒマラヤに迄出かけて地球温暖化に一役買ったと内心忸怩^{じうじ}たるものがあるが、山好き車好きの年寄りの一つの選択とお許し頂こう。ものはついでに一つの提案がある。カトマンズからルクラ(シヤンボチエ)へ一五〇キロ、エベレストを越えてシガル(滑走路設置の案もある由。今でもツインオッター級



秩父宮記念学術賞授賞式

なら何処でもOK)へ一八〇キロ、シガルからシヤパンマBC付近(シガル同様現状でもOK)へ一五〇キロ、シヤパンマを越えてカトマンズ

山の気象研究会々長

秩父宮記念学術賞受賞

大井正一氏に

平成二年度の秩父宮記念学術賞は当日本山岳会より推薦の山の気象研究会々長大井正一氏による「登山に於ける気象学の研究」が授賞した。

山の気象研究会の創立は昭和三十一年、当時は天候悪化による山の遭難が多発していたので、これを防ぐにはどうしたらよいか、これを討議するため気象庁山岳部が母体となって、都内の大学、会社の山岳部や登山グループに呼びかけて、昭和三十一年六月九日、気象庁会議室において「山の気象座談会」が開催された。それが発展して設立されたのが、山の気象研究会である。それ故、初期の頃は山の遭難防止のため、ラジオを聞いての天気図の書き方見方、山の気象知識普及などをかねて講習会も開催、また参考文献の紹介、研究発表などを年に何回も行った。

初期の頃の研究は、国内の気象遭難のときの事例解析などが主であったが、会員のレベル向上とともに、最近ではかなり高度化し、また研究の対象

へ一二〇キロ。この四地点を結ぶツインオッター、キャラバン、ビラタス級による空路を利用する山歩きについて識者の一考を煩わしいものである。

も国内ばかりでなく海外にも向けられるようになった。

会の事業としては、今までの研究会ニュースをすべてまとめて製本したり(総集版I、II)、主な研究のみをコンパクトにまとめた(特別号)そのいずれもが日本山岳会に寄贈されている、また一般向けの出版(「山の気象」I、II 恒星社発行)も行っている。

今回の受賞テーマは、山の気象研究会々長大井正一博士による『登山における気象学の研究』で同研究会の多年に亘る登山界に対する貢献と、大井博士による山雲の発生機構の理論的解明等が評価されたものである。授賞式は、三月十三日、日本工業倶楽部において秩父宮妃殿下臨席のもとに行われ、レセプションの会場では、展示パネルを前に、大井博士より親しく説明を受けられた。

今回の受賞に当り推薦団体として日本山岳会の他、日本気象学会、日本山岳協会からも推薦を受けた。とくに日本山岳会には三年間にわたって変らぬ

ご推薦をいただいたことを、厚くお礼申し上げます。(科学研究委員 奥山 巖)

お礼のことば

このたび、山の気象研究会が第二十七回秩父宮記念学術賞を受賞しました事は、会員の努力もさる事ながら、日本山岳会によるご推薦も極めて大きな要因となりました。心から御礼申し上げます。

思い起こせば山の気象研究会なる名称をはじめ作ったのは、昭和二十九年暮、日本山岳会学生部幹事鈴木幸二君でしたが、このことは十二月二十九日同君の遭難とともに消え去った。し

追悼

跡部昌三(本名昌三郎)氏

昨年十一月に庭木の手中、脚立から落ちて大腿骨を骨折、入院中であつた。二月初めにお見舞いに伺った時は「骨折の方は順調だがついでに力カトの疾患を手術したのでリハビリも出来ない」とおっしゃっていた。

元氣であつたので安心してしたが、突然意識不明となり、二月二十七日、八十五歳の誕生日目前に亡くなられた。病名はガン性胸膜症。

明治三十九年三月名古屋市に生まれ、大阪の綿布問屋に勤めていた頃OKTに入り、RCCの影響を受けて岩

かしその後、山の気象研究会が設立されてからも日本山岳会とは、マナスル隊への協力、科学研究委員会による登山のための気象学講習会開催、チョモランマ三国交叉縦走への協力、マッキンリー遭難気象の研究、文献の調査など、多くの協力関係を結んできました。山の気象研究の発展には日本山岳会々員諸兄姉による御指導御鞭撻が是非必要で、このことを今後とも宜しく願ひするともに、是をもって御礼の言葉と致します。本当に有難うございました。

(山の気象研究会々長 大井正一)

と雪の近代アルピニズムを身につける。

病気で名古屋に帰ってからは登山道具屋を始め、昭和十年、立遅れていた名古屋の登山界に光岡清氏と共に近代アルピニズムをかけた名古屋山岳会を設立する。

東海地方のクライマーを数多く育てた御在所岳の岩場を開拓し、また、木曾駒を盟主とする中央アルプスのバリエーションルートに目を向け、奥三の沢の完登を始め、四季を通じて精通する。

氏の特質は実践面ばかりでなく、文章をよくし、会報の編集には自からガリを切り、表紙のデザインからイラスト



甦る山・菅名連峰

樋口宗一

菅名連峰は新潟県五泉市の行政区域内に在る山々であるが、標高僅か一〇

トまで、実に達者なものである。

先年、関西登高会の書庫で見つかったOKTの機関紙「峰」は、原稿をそのまま綴じて表紙をつけただけのもので、氏の内容もさることながら、レタリングをほどこしたタイトルなど、実にいていねいな出来で、一人出色ものであった。

戦後は「跡部昌三の店」のかたわら「岳人」の編集に長けたずさわり、どこまでも登山とかかわりのある生活であつたが、「岳人」が東京に移ってから「店」もたんで、小牧市郊外に隠居されていた。(大口瑛司)

△ △ △

〇〇財にも満たず、裾野には母なる阿賀野川と、川内山系より流れ出る早出川の清流に囲まれ、ブナ等の樹林の成育にも恵まれて来た。だが、藪山で登山の対象の山としての魅力が貧しかったこともまた事実であつた。

新潟市とその周辺の市町村より、日帰り登山の出来る、下越地方の山は数々あるが、その中にも人気のあるのが、五頭山、白山岳、二王子岳、焼峰山で、ここに列記した山々は、各々個性があり、昔から登山者に親しまれて来た。だが、華やかな山々より取り残されて、最後まで登山者を藪で拒み続けて来た、菅名山塊がある。それは五泉市郊外の東に聳びえる山々で、中央に、主峰の菅名岳(九〇九m)、南に大蔵岳(八六四m)、三五郎山(九〇五m)、北に鳴沢の頭(八八〇m)を配し、今は総合して菅名連峰と呼ぶ。

昭和三十五年迄は藪山で登山道もなく、訪れる登山者は稀であつた。ただ、低山にも関わらず、ブナの大木が林立しているの、自然の恵みの葎が豊富に採れ、シーズンともなると、地元の茸狩りの人々で賑わうぐらいであつた。私も昭和三十年頃、何回か登つたことがあるが、その頃の山行は社会一般から視ると、山道楽としか認識されていなかった時代であつた。

そんな時代であつたから、地元で登

山道の開拓の盛り上がりだが、遅れたのかも知れない。その頃菅名岳山頂を極めるには、切畑沢を登りつめて、それからが大変であった。藪漕ぎの連続で、雨上がりの時などは山ヒルの洗礼を受けることがあった。山頂には灌木が密集していて、木の上に登らないと展望も俟たず、登頂の醍醐味も味わうことはい出来ない。

そんな菅名連峰にも脚光を浴びる時が来た。昭和三十六年、地元山岳会の手で、登山道の整備が進められた。

まず、切畑部落より尾白川沿いを登り、丸山尾根より菅名岳へ達する登山道が完成される。また、山頂では、付近の灌木帯を伐採し整地を施し、登山者の安らぐ場所と道標も立派に出来上がり見違える様になっていた。

その頃、菅名連峰の北側の鳴沢の頭より下った阿賀野川沿いに、開発されたばかりの咲花温泉があり、新しく旅館街が形成されつつあった。

湯量の多さと風光明媚を誇って、遠方からの湯治客にも評判が良かった。そこで、登山道も菅名岳山頂より南側の稜線を歩き、鳴沢の頭に達し、それより必然的に、咲花温泉の方に向けて伐り開かれる。

その頃から、登山道が伐り開かれたことにより、菅名岳周辺の自然の魅力が注目され始めていた。今は市内、市

外の自然保護団体の、環境保護の管理下にあり、また、直径一畝余りもある、ブナ、ミズナラ、カツラ、等の大木群が林立し、中でもブナの巨木は目を見張るものがある。かくて、昭和五十年頃菅名岳周辺のルート開拓は終る。だが、菅名連峰南側半分の山域、大蔵岳、三五郎山の大蔵岳山域が藪山のまま残されていた。この山も訪れる登山者もなく、それを昭和六十一年頃よりJACC会員である五泉市の井上光男氏と市の山岳団体の手に依り登山道の開拓が始まる。登り口は幅集落よりで、林道を幅沢沿いに登り、通称・通行遮断機より各尾根に取り付くコースで、右は大倉尾根より大蔵岳へ、左は幅沢を途中迄登り、それより菅名岳よりの丸山尾根へと伐り開かれる。大蔵岳山塊の登山道も完成したが、最後に残された、大倉岳山頂より三五郎山山頂を経て、菅名岳に達する稜線の縦走コースが、昭和六十三年井上氏と山岳団体の手で、藪との戦いで奮闘され、その年に完成する。

菅名連峰の総てよりの登山道は、開拓の終局をみる。新しい縦走コースよりの展望は素晴らしく、飯豊連峰を初め、会津磐梯山、御神楽岳が望まれる。その後、山頂付近に井上氏と他の人達で、避難小屋の建設が計画され、建設のための材料が担ぎ上げられ、一年がかりで建てられ、そして今は、多くの登山者に利用されている。

菅名連峰の何れのコースもブナの大木に覆われ、藪山から緑豊かな、魅力に満ち溢れた山として生れ変わり、登山者および自然愛好会の人々に親しまれながら登られている。

登りは各コース共に、所要時間は約二時間である。

なお、問合せ先は新潟県五泉市役所商工課(〇二五〇―四三―三九一)で、そのほかに五泉市泉町二―二二(〇二五〇―四二―五〇七九)樋口まで。

全国の会員の方々も越後へ来られた節は、身近な自然に触れられる菅名連峰に立ち寄られ、また咲花温泉に入り、越後の山の思い出を作るのも、楽しみの一つであろうかと思います。

(俳句)

十一月の山日記

川崎精雄

熊森山(三日)

藪こぐや新雪の富士まなかひに
木洩れ日に深山樺の真赤な実
トラバース猿取茨が阻みけり
千頭星山(七日)

独り立つ地蔵仏岩冬近し
白樺と照る鈴生りの七かまど

双耳峰雪待つ姿弛みなし
冬に入る岳剥落の生々し

至仏山(十二日)

山々に雪舞ひ麓うす日さし
氷る岩避け道松の雪をこぐ
久瀧の頂雪と風猛る

米山、弥彦山(二十日)

米山さん雪出てすぐに時雨けり
山頂の北風を背に薬師堂
稽生ふ弥彦風にかかはらず
箱根山(二十三日)

姫沙羅の樹肌をすべり冬めく日
小春日の尾根突兀の金時山



図書
紹介

鳥学を支えた岳人

林 正敏著

この本は日本野鳥の会諏訪支部長の著者が、本会名誉会員で元信濃支部長の高山忠四朗氏について語ったもの。

高山氏の父・鼎二氏から始まった北アルプス一帯に生息する鳥の標本採集が『日本鳥類大図鑑』や『日本北アルプスの鳥』といった本の完成に重要な

役割を果たしたこと、あるいは父子二代にわたって採集された鳥の標本が、鳥類学者・黒田長礼を介してイギリスへ渡ったり、あるいはストックホルム博物館にも所蔵されているらしい、といった、山関係者のあまり知らないようなことが語られている。

ただ健康を害している最近の高山氏からの聞きとり取材が充分でないこともあり、山と高山氏との関わりについてはもの足りないが、「鳥」を中心とした部分には耳新しいものが多く、高山氏の奥ゆかしい人柄を感じとることができ、その点で好著といえる。

一九九一年二月 信濃毎日新聞社刊
一四八頁 定価二二〇〇円

(岡沢祐吉)

北アルプスの

こなしかた

山下喜一郎著

山に登ること、山をこなすことの違いを、山岳写真家ならではの体験を通して語る楽しい北アルプスの案内書である。

著者は、北アルプスを「季節の節目節目に見せる美しさは世界第一級、繊細でいながら色彩豊かなところは神秘的ですらある」と讃え、その「こなし方」を白馬岳から乗鞍岳まで、鋭、立

山、薬師を含めた十一の山域に分け、具体的な登山計画を示しながら紹介している。

この本を読んでいると、著者が語る北アルプスの魅力に思わず引き込まれてしまう。春は新緑と残雪の山々を巡り、夏には雲海を見下ろす稜線に佇む。そして秋には燃え上がる紅葉を訪ね、冬山への序章に心を熱くする。

そんな気分になさせてくれるのも山岳写真家として見てきた美しい北アルプスの風景をただ語るというのではなく、著者流の楽しみ方を惜しげもなく次々と披露しているからであろう。

釧岳では「釧沢で焼き肉、ビールもいいね」とその料理方法を説明。燕岳では「中房温泉はいで湯のデパート」と題して砂を掘ってのふかし芋や、ゆで卵のつくりかた等、それぞれの山域ならではの魅力が記載されている。

雲の平では山岳写真講座を展開し、読んでいるだけで、花崗岩に縁どられたお花畑が広がる雲の平にいたような臨場感を味わうことができる。

永い間の北アルプス詣を通じての結論は「自然と仲良しになるということ」という著者が、山の写真を撮ることについて「単に山を歩くことから脱却する一つのきっかけにはなると思う」とその経験も述べているが、うなづける一冊である。

一九八九年十二月二十日 森林書房
刊 二〇二頁 定価一五〇〇円

(角田啓蔵)

ヒマラヤを駆け抜けた男

山田昇の青春譜

佐瀬 稔著

山田昇氏が「八〇〇〇が峰十四座を完登するまで」を同時進行で雑誌「岳人」に連載する予定であったのが、連載の第一回を書き終えたところでマツキンリーから遭難の報が届き、同時進行どころか、稀有のアルピニストが足早に歩いて去ったあとを、ノロノロとたどる作業となってしまうと、と著者はあとがきに書いています。

著者は新聞社出身のノンフィクション作家、これまでも『狼は帰らず、アルピニスト・森田勝の生と死』『喪われた岩壁 第2次RCCの青春群像』など登山に取材した著書がある。

本書では山田昇氏の歩みを多くの山仲間と絡めて描いている。高校時代の親友の石井純氏、師と仰ぐ小暮勝義氏を始めとする群馬の仲間たち、最高のパートナーだった斎藤安平氏など。そしてメスナー、ククチカに迫る第三の男が群馬から生まれた背景を克明に追っている。

また山田昇氏について「彼は、人間との生活に倦んで山に行くのではなく、人間を愛するがゆえに山に登る。彼は日常生活を営む場所よりはるかに高いところで、極度に純化され、先鋭に研ぎすまされた人間関係を発見していた。」とその人物に迫っている。話していて、向こう側が透き通って見えるような、不思議なくらい美しい人でした、と結んでいる。

一九九〇年九月十日 東京新聞出版局発行 二三〇頁 定価一四〇〇円

(継松久美男)

山歩き讃歌

人と自然に魅せられて

小倉童子著

『女の山歩き、山登り』につづいて、昨年十月に出版されたこの本は、一九八七年六月から一九九〇年五月まで、オリジナル・タイトル「人と自然と、ちょっと冒険」と題して、共同通信社スポーツ特信部によって配信されたものをまとめたエッセイ集である。一、自然のやさしさ厳しさ、二、山でみつけた素敵な出会い、三、夢が広がる、ちょっと冒険、四、いまどきの山歩き、五、身辺四方山話、と五章に分けられていて、それぞれが十余りのエッセイ

で構成されている。著者の配慮で、より現実的感覚で読んでいただけるようにと、文末に執筆時の年号が記してある。

「早大の山岳部に女性あり」と、ほとんど同時代の関西の一女子大生であった私にも聞こえてきました。その当時の男子中心の大学では、運動部は女子の入部を認めてはいませんでしたし、よしんば入部できたとしても、お荷物であり、お客様でした。めぐまれた環境に育ち、そして伝統の早大山岳部へ女性としてはじめての入部。著者が、自分の運命がこの時から変わろうとしていたことを、私は知るよしもなかったと述懐しているが、能力を持って生まれた者の義務であろうか、早大赤道アフリカ遠征隊への参加、そして女ばかりの車による南米大陸縦断、東欧、サハラのアドベンチャードライブ。ちょっと冒険というにはスケールが大きすぎるが、たとへスケールが違っても、読む者にささやかでも私にもちょっと冒険をと思わせる。「ちょっと冒険」とはなんと魅力のある言葉だろう。第四章、いまどきの山歩き、では中高年に対するアドバイスがさりげなく語られている。第五章、身辺四方山話では実名で登場する山岳会員の話に、思わず声をあげて笑ってしまったが、小さな命を失ったことのある著者の、両手でそつとつむような命あるものへのいとお

〔自然保護随想〕

尾瀬の自然は護られている

わが国の自然保護運動の発祥の地、尾瀬沼畔に昭和六十年尾瀬沼ビジターセンターが新設された。早いもので創設以来早や五年が経過し、ボランティア活動も軌道にのったように思われる。開設時より自然解説員を拝命したが、その責任の重大さを痛感している。

近年、交通機関の発達にともない旅行業者が送り込んで来る観光登山者が目立つようになった。そのため国立公園の利用のしかたが変化しつつある。名所・旧跡をかけめぐるような人々、そのなかには尾瀬の名物は、どんなお土産でしょうか、とたずねる者もいる。そのような方々には国立公園の自然・文化的価値を理解させ利用にあたり自然への悪影響を最少限にとどめるよう注意をはらい、一ヶ所にとどまって周囲の自然をじっくりと味わうような楽しみ方を知ってもらうよう心掛けています。

私がアメリカ、カナダ、ヨーロッパ諸国の国立公園を訪れて感じたことは、自然公園を訪れる人々はホテルに泊らず自然の中の山小屋などに宿泊を希望し、レンジャーの自然解説を聞いたり、夕方にはキャンプファイアーを楽しんだり、ビジターセンターで映画を見たりして過す

しみると、みずみずしい情感がただよっている。輝きつづけている人の、痛快であり、心暖まるエッセイである。

一九九〇年十月四日 (株)共同通信社
発行 二四六頁 定価一〇〇〇円

(中條昌子)

関東周辺

山と地酒の旅

坂倉登喜子・
小川清美共著

なかなかユニークな本である。

が、わが国の登山者は風のごとく来てまた風のように去ってしまう。そして山里の温泉旅館でドンチャンさわぎをするのが関の山である。なかには自分が国立公園の中にいることさえ知らない人がいる。じっくりと自然の中での生活を楽しむ個性的な山旅ができないものである。国立公園が真に自然とのふれあいの場となるためには今後は利用者へのサービスを山小屋や旅行業者にまかせず環境庁が中心になって、国立公園のすばらしさを伝え文化の高い楽しみ方を普及して行く必要がある。

昨年十月に婦人懇談会主催による尾瀬沼全国集會が開催され、會員が集い自然保護シンポジウムが開かれたことは誠に心強いものを感じた。その折にカナダ山岳会のステファニックご夫妻にお目にかかったので、尾瀬の自然保護についてお聞きしたところ、大変に良い状態で護られているとの評価であった。しかし登山者の多いにはおどろいていた。

翌朝長蔵小屋では遠来のステファニックご夫妻に日本のお茶が差し出されていた。日・加文化交流(少し大袈沙かな)を果している平野紀子さんの笑顔がとても印象的であった。

この笑顔があるかぎり尾瀬の自然は護られるであろうと確信した。

(尾瀬沼ビジターセンター自然解説員 中村武雄)

山と温泉を結びつけた旅の本は多いようだが、地酒を結びつけたものは数少ないように思う。しかし、よく考えて見れば、日本全国に山の名を冠した地酒が多いの気がつくから、こういうテーマの本が生れても不思議はない

のかも知れない。

本書はご存知、新潮社の「とんぼの本」で、記事の大部分は「新ハイキング」誌に掲載されたもので、題名の如く関東周辺の低山への誘いと山麓付近に散在する酒造元の見学記二十五篇と「お酒ができるまで」「ハイキングの楽しみ方」の二篇からなっている。いずれも坂倉さんのいかにも女性らしい詩にも響えられる美しい文章とプロカメラマン小川清美氏の素晴らしい山里の写真で構成されている。そのためご用とお急ぎの方は写真集としてだけでもよいような本で、パラパラと頁をくるだけで楽しく、しかもほのぼのとしてほえみを誘うような本でもある。

登場する酒は白扇、武甲正宗、武蔵鶴、君が旗、魁雪、慶長、多満自慢、盛升、白笹つづみ、箱根山、寿萬亀、木戸泉、笹一、菊里、七賢、谷桜、真澄、神渡、甲陽自慢、梅檀、富水、春鶯囀、山清、宮泉、此花、末廣、大和川、清開、八海山、聖徳、初鶯、樹里の三十二種。いずれも左党の筆者にはなじみの深い酒ばかりで、今夜の晩酌はどれにしようかと迷いそうだ。

ただ一読者としてみれば、本書はガイドとしてはやや舌足らずのような気がする。しかし次の山行を決めるのによきヒントを与えてくれるものだと思

えばよさそうだ。それからもうひとつ、これはこの種の本のいずれにも言えることだが、吾々が本書を読んで、現地を訪れた場合、誰もが登喜さんのような歓待を受けるということはないのではなか、ということである。これはひとつの読者の錯覚であるかも知れないから致し方ないが、現実にはそんなに甘くないということも心に秘めてから旅立っていただかないと、夢や期待と現実とのギャップにがっかりするかも知れないものもあるように思う。

一九九〇年十一月 新潮社刊 A5
判 一二〇頁 定価一三〇〇円 (小倉 厚)

富士山はなぜ

そこにあるのか

貝塚爽平著

見出しの通りに受けとって、富士山の成因や位置を論じた系統的な学術書と云う種類のものかと思うとそうでもない。ましてや登山者や山岳愛好家を意識して書かれたものでもない。著者は名だたる地形研究者であり、地形や第四紀地質の啓蒙的普及にも関心を払って来た人である。これまでに著者が投稿した一般向け解説的文章を集成し、加筆して本書が編集された。全体は二十三節から成るが、内容の

関連から、第一部東京の自然、第二部日本の自然、第三部自然の見方の三部にグルーピングされる。書名と同名の節は第二部に含まれており、富士山の位置がプレート境界と火山フロント(火山帯)の交叉するということ、世界的にも特異な場所にあたっていることが、最新の地学的知識をもとに判り易く説明されている。

第一部は『東京の自然史(一九六四年刊、紀伊国屋新書)』の既刊書もあり、関東ロームや台地・低地の地形発達史を専門とする著者の得意とする分野に関連する話題である。「日本橋と丸の内」「神田の谷」「山手線から見える地形」など啓発を受ける内容が盛り込まれている。

第二部には前述の富士山のほかに東海道沿いの地形の話題が二つ分とさらに「小笠原で考えたこと」と「隆起を続ける硫黄島の一七七九年の記録」があって圧巻である。本書全体は登山家向きではないが、この部分は自然保護に関心のある我々にとっては捨ておけない。小笠原父島の南島周辺の沈水カルスト地形の美麗なカラー空中写真や硫黄島の発見時の古記録、等隆起線図など基本的資料としても貴重である。

第三部は地質時代としては最新の、一七〇万年前から現在に至る間の第四紀に關係のある気候や環境の変化や、

地学で扱われる時間と空間をどう知的に吸収したらよいかなどが解説される。いずれの文章も達文でかつ工夫がこらされており、山岳を直接扱ってはいないが、山の地形や自然に対する深い理解を得るのに必要な基本的知識を提供する書物だと思う。

一九九〇年二月刊 丸善(株)刊 B6
判 一七四頁 定価一五五〇円(税
四五円) (式 正英)

飛驒の山々 ヤブ山編

酒井昭市著

山国飛驒にはいったいどれほどの数の山があるだろうか。標高一〇〇〇以上で二〇〇座、いやそれをも越えるのではないだろうか。北アルプスのあまたの名山もそうだし、白山山系の山もまたこの中に含まれる。さらに、これら大山脈の間には幾重にも広がる山の連なりがある。

本書は、その北アルプスと白山の間、いわゆる飛驒高地と呼ばれる山域にスポットをあてたガイド紀行である。こ

こには、天蓋山、日影平山、金剛堂山、人形山が、あるいは川上岳や高天良山といった標高千数百級の中級山岳がひしめいている。

じつはこの山域、これまで岳人はほ

報告

第七回国際低酸素症シンポジウム

「高山病に関する国際的合意」について

中 島 道 郎

とんど見向きをしなかった。それは、著者が「標高の割りには凡庸で、山谷も見応えせず、……大半が人工林で覆われ、チシマザサが厚く、仙道や登山道のない山が多い」と、評すことに符合する。ひっそりと静まりかえった山がある。何ら取りえないヤブ山ばかりである。ところが今では、そういった登山者があり入ったことのない山は貴重というほかない。ここでは、指導標があるわけがなく、地形図と磁石によって、ルートを探し出すという楽しみが味わえる。著者は、これらの山へ三十年あまりも通いつめたという。飛騨の人々にとっては里山であり、生活と深くかかわりを持ってきた山である。本書ではそんな山を、岐阜県人として、山村民俗の研究者として、さらに地元の人としての視点で、豊富な写真と概念図を加えながら、九十余の山々を紹介している。

表記のシンポジウムがさる二月二六日より三月二日まで、カナダのレイクルイーズで開催され、出席してきましたので報告致します。

「低酸素症」シンポジウムといっても、実は「高所医学」が中心のシンポジウムなのですが、その展示発表の部においては、一二題のうち、三四題、つまり全体の四分の一は日本人による発表でした。この調子で、ヨーロッパの学会でも日本の業績を上げていくものです。

このレイクルイーズ・シンポジウムは日本でもかなり知られてきました。が、次回は一九九三年二月九日から、十三日にかけて開催されます。今回参加出来なかった方々も、次回は是非ご参加下さい。なかなか有意義なシンポジウムです。普通の登山家も大勢参加しているシンポジウムであることを強調しておきます。その日が近付きましたら、またこの紙面をお借りしてお知らせしたいと思ひます。

一九九〇年十一月十日 ナカニシヤ
出版 B五版三一六頁 定価二五〇〇円
(安藤忠夫)

「高山病についての申し合わせ事項」が、出席者全員によって国際的に合意されましたことを報告しておきます。(後述)。これで「高山病」の概念がはっきりしました。これからは、世界中の論文がこの基準で高山病を論ずることになります。ですから、われわれの間でも、高山病に関する記載は、すべてこの基準に則して記述して頂くよう、提案します。詳しくは、この七月十三・十四日両日、河村栄二会長のもとに北里研究所病院で催される、第十一回日本登山医学シンポジウムの席上で私が説明致す方針ですが、とりあえず、ここに合意内容だけ報告しておきますのでご承知お下さい。

○急性高山病(AMS)に関する申し合わせ事項(レイクルイーズ、一九九一年三月二日)

〔定義〕

一、急性高山病(AMS、エイムス)

高所に到達してからまだあまり期間がたっていない、という前提において、頭痛、ならびにつきにあげる四項目の諸症状のうちの少なくとも一項目が存

在するもの。①消化器症状(食欲不振、むかつき、または嘔吐)、②疲労または脱力、③めまい、またはふらつき、④睡眠障害

二、高所脳浮腫(HACE、ヘイス)

重症AMSないしAMSの最終段階と認識して差し支えない。

高所に到達してからまだあまり期間がたっていない、という前提において、AMS症状があり、これに精神状態変化および/または運動失調を伴うもの。または、AMS症状がなくなると、その両方が存在するもの。

三、高所肺水腫(HAPE、ヘイプ)

高所に到達してからまだあまり期間がたっていない、という前提において、以下に述べるような状態にあるもの。

症状・次のうち少なくとも二つがある。安静時呼吸困難、咳、脱力(身体が思うように動かない)、胸部圧迫感(鬱血)

徴候・次のうち少なくとも二つがある。四肺野のうち少なくとも一肺野に湿性ラ音ないし喘鳴聴取、口唇チアノーゼ、呼吸促進、頻脈。

〔AMS重症度自己判定表〕

〔性〕男、女、〔年齢〕 歳

その高度に到達してから四八時間以内の健康状態について、これが次の各症状項目の五段階のうちどれに当てはまっているか、自分で判断し、その番

号を○で囲みなさい。

頭痛：

- 0：全く無し
1：軽い頭痛
2：中等度の頭痛
3：強い頭痛、気分が悪い。
4：嘗て経験したことが無い程ひどい

消化器症状：

- 0：食欲良好
1：いつものように食欲が湧かない
2：むかついて食欲がない
3：強いむかつきのため食欲全くなし
4：強いむかつき、嘔吐。食事不能

疲労、および／または、脱力：

- 0：全くない
1：少し感じる
2：かなり感じる
3：非常に強く感じる
4：疲労困憊、および／または重度の脱力

めまい、および／またはふらつき：

- 0：全くない
1：少し感じる
2：はっきりと感じる
3：非常に強く感じる
4：おそろしく強く感じる

睡眠障害：

- 0：全く問題なし。快眠。
1：数回目が覚めた

2：何度も目が覚め、よく眠れなかった。

3：殆ど眠れなかった
4：おそろしく全く眠れなかった
合計：点

その他の質問事項(点数には加えない)
病感：

0：全くない
1：少し感じる
2：はっきり感じる
3：非常に強く感じる、具合がわるい
4：もう死にそうだ

(これは、これ単独で全体的な重症度の判定基準に使えるかも知れない)

活動能力：

0：普段と全く変わらない
1：少し落ちている
2：はっきりと落ちている
3：極めてひどく落ちている
4：何も出来ず寝たきり

〔臨牀的診断基準〕

先の自己診断評価点に、以下の臨牀的評価点を客観的に診断して、総合的に判断する。

精神状態の変化 0 1 2 3 4

0 正常

1 傾眠／倦怠

2 見当識失調／混乱

3 昏迷

4 昏睡
運動失調(趾尖・踵歩行) 0 1 2 3 4

0 正常
1 綱渡り様歩行
2 線から踏み外す
3 倒れてしまう
4 立てない

四肢浮腫 0 1 2 3 4

0 認めず

1 四肢のうち一肢

2 二肢

3 三肢

4 四肢に認める

ラ音 0 1 2 3 4

0 聴取せず

1 四肺野のうち一肺野

2 二肺野

3 三肺野

4 四肺野に聴取

合計：点

自然保護委員会

秩父自然観察山行

春まだ浅い三月三日の節句に秩父の小鹿野町尾の内で、自然観察山行を行った。今回は大型中型哺乳動物の観察ということもあって、三十一人の参加があり、快晴に恵まれて有益な山行を楽しむことができた。

朝早く七時に新宿西口に集合、関越自動車道を北上する。この山行は遠藤委員のきもいりで計画されたユニークな動物観察山行で、澤井委員長の説明を聞きながら、花園インターからバス

はいいつしか秩父鉄道沿いの田園情緒豊かな秩父路にはいる。破風山・城峰山や、かつての荒川の洪水の記録的水位の説明がある。長瀬・宝登山を過ぎて、いよいよ小鹿野町への赤平川沿いの道を上って行くが、和名倉山の巨大な姿や奥秩父連峰の北面が雪深く真珠のように輝く。動物の実物大の足跡を示したパンフが面白い。ニホンカモシカ・ニホンジカ・ツキノワグマ・ニホンザル・イノシシ・タヌキ・キツネ・アナグマ・テン・イタチ・オコジョ・ノウサギ・ニホンリスの個性ある足跡は興味をそそるが、果していくら会えるだろうか。

二九九号線の奥の坂本橋についたのは十時三〇分得意外に早い。本日の講師の山中豊彦氏の紹介がある。同氏は両神村薄住で、尾の内の県自然環境保全地域に私有林を持っておられ、すぐにその山を登りながら説明を聞く。

栗の二次林が多いのは枕木用とのこと、ウサギの足跡を発見する。アカネズミの食べたクルミやイノシシの多数の踏み跡に緊張するが姿はない。予想に反して動物たちは姿を現さないが、

多くの猪の掘った怒田場やカモシカの角でこすられたミズナラなど丁寧な説明がある。見晴の良い尾根に出て、葉用になるキハダやイノシシに殺されたウサギの毛、山の神の杉の巨木の孔に隠れるムササビの話など尽きない。

昼食時に山中氏の話では両神山地带では近頃遭難が多く、山の仕事をしていると現場を見付ける土地勘がはたらくとのこと、切実な話に時間のたつのを忘れる。

カモシカの被害もヒノキの単一樹相で起きるので、他種がまざれば避けられるなど、自然のバランスに感心する。秩父鉾山の製錬の跡やミズナラに出来たクマ棚の説明を聞いて、一時二〇分に出発地に戻る。期待した(半分はこわい)クマなどに会えず残念であったが、ここならではの有益な話に両神山再遊を約して帰途につく。帰りは関越道の渋滞もあったが、新宿に五時に帰った。

このようにきめの細かい自然観察は保護運動の基礎となるので、今後も計画されると良いと思う。

(参加者) 山中豊彦(講師)、松本恒廣(担当理事)、澤井政信、渡辺正臣、小倉厚、梨羽時春、遠藤光男、池田剛、木名瀬亘、近藤緑、横山隆、黒沢秀雄、渡辺徹、中村武雄、高橋実万、山田靖子、菅野弘章、賀嶋増造、田村

説三、荒木正弘、石橋正美、三宅達夫、三宅朝雪、野沢常夫、橋口明子、桐山裕子、赤松光、坂尾藤江、鶴田稔、室隆雄、原謙一 (木名瀬 亘)

九一年八方尾根

スキー集会

私は新入会員として、初めて、本集會に出席しました。感じたままを報告致します。

第一日目(一月十二日) ロマンスリフト始発に乗り、午前九時頃八方池山荘に到着しました。早速、つば足にて第三ケルン下、息ケルン迄散策をし、白馬三山、唐松岳、五龍岳、鹿島槍、遠見尾根の景観を眼前にして、一人悦に入り大満足の一時を過ごしました。この快晴は日没まで続き、唐松岳登頂も夢ではなかった様に思われました。四時頃にはほぼ全員(会員二十七名、一般参加十五名)が集合、今や遅しと、随所で酒盛りが始まってしまいました。六時三十分主催者挨拶の後、大先輩の乾杯の後食事、八時から懇親会とお酒と共に語り深夜まで及びました。

第二日目朝から地吹雪が強くなりフットは止まったり動いたりコンディションは最悪でしたが、スキー狂はスキーにひたすら酒をくみかわすグループ、正月の疲れを寝ることで癒す人等、一日

を有意義に楽しまれていました。夜の懇親会は今集會の一番の圧巻で、老若男女全員一体となって余興(ジャンケンゲーム等)に笑いこけたことは、健康的で、今さら山男の心根が窺がわれ、忘れ難き夜となりました。

第三日目朝方の快晴に十二、三名が唐松岳にスキーで挑戦しました。八時に出発し、八方池上方の樹林帯の半ばで、ガスが発生、まもなく視野がなくなり下山を余儀なくされました。夜の懇親会は、昨夜とは打って変って、合唱に、独唱に感心するやら、笑うやらただただ頭の中をからっぽにする程の夜となりました。就寝後も高らかに合唱が続いたとか？

最終日、朝八時、第一ケルン前で八方池山荘をバックに記念撮影をし、解散となりました。今回のチャンスを与えて下さいました集會委員の皆様のご苦勞に感謝し、スキー、山の楽しい思い出を胸に下山致しました。(川島淳志)

三水会現地集會

十二回を数えた

竹寺集會

竹寺は医王山八王寺というのが、正式寺号である。通称竹寺とは、境内い

たるところに茂る孟宗竹に由来する。宗派は天台宗だが、壇家を持たない寺にとって、これを活用しない術はない。灰皿はもとより、酒器、料理の器等から土産用の花器、箆にいたるまで、この素材が生かされている。

この竹寺集會は昭和五十二年に始まり、三度降雪のため中止を余儀なくされたが、平成三年の今回で十二回を数え、三水会の恒例行事として定着した。池袋を出発する時から暖かい日であった。飯能からのタクシーでは「今年一度しか雪が降りません」との由。

竹寺に荷を置いて鐘撞堂に登る。木立が生い茂り、年々眺望は悪くなったが、蕎麦粒山から棒の折山に続く県界尾根や、有間山の眺めは健在であった。夜の宴には素切りの竹の器に盛った風雅な精進料理と、竹筒に入った薬湯がふんだんに促される。大野住職からはめずらしく、浅草・金龍寺(浅草観音)での修行時代、六区を闊歩したことなどが披露され、にわかに生臭くなった。

翌日の出発時には小雪が舞い、風情を醸し出した。やはり二月の奥武蔵である。明るく拓けきった豆口峠から子の権現に向う。

天長九年(八三二)子の年、子の月、子の日、子の刻に生まれ、この地に庵

を結んだ子ノ聖人の遺訓を奉じて開かれたことからこの名のある子の権現も正式寺号は大鱗山天竜寺という。

火伏と足腰の病に靈験あらたかとされており、われわれ中年一行、なんのためらいもなく参詣のため階段を昇った。そのあとには浅見茶屋の手打うどんも待っている。

吾野までの道はすっかり舗装され、小一時間の道のりは、四方山話しに花を咲かせる格好のプロムナードとなった。

二月九〜十日のことである。

〔参加者〕乾能尚、片岡博、河野幾雄、河野之保、坂倉登喜子、高田真哉、滝沢ちよ子、鶴岡元之助、鳥居亮、中保内藤勇、平沢哲臣(翌日参加)、横溝修一他五名。
(高田真哉)

小原勝郎さんを偲ぶ会

昨年一月二十三日逝去された名誉会員小原勝郎氏を偲ぶ会が二月十六日市ヶ谷グリーンパレスホテルで行われました。

松田雄一氏の司会で、晴子夫人、御子息岳郎氏、島田、堀田、麻生、田口、望月、織内、今西の各名誉会員の他出席者は六十七名になり、氏の積雪期の北アルプス、第三次マナスル遠征隊で

の活躍や、常務理事、常任評議員として山岳会に尽くされたさまざまな交りの広がり、足跡を、織内、今西、島田、堀田、小倉(重子)、関口(周也)、山本(朋三郎)各氏によってその一端が語られ、登山史のひとこまを思い起こさせるひとときでした。

また、氏の人柄にふれた参加者のお話にはいつも暖かい心で先輩や後輩とのふれ合いや、ご家族への思いやり等……食事と歓談の時間はまたたく間に過ぎて帰りに、参加者全員に、小原氏が生前に描かれた暖いお人柄の漂う絵葉書を頂戴できた土曜日の午後でありました。
(穴田雪江)

会務報告

三月理事会

三月十四日(木)十八時三十分
場所 本会ルーム

出席者 山田会長、村木、藤平両副会長、西村、早坂、入沢、小倉、穴田、石橋、織田沢、松本、神崎、藤井の各理事、嶋原、小倉、橋本各常任評議員、太田、飯野両監事
〔委任出席〕松田、重広、伊丹、関口の各理事、大島、平林、大森の各常任評議員
議事

一、ナムチャバルワ登山隊の件(村木副会長)

〔北京会議報告〕

二月二十四〜二十七日、村木副会長、重広理事が出席、登山隊の構成、登山計画等について概ね日本側の案で決めることができた。

日中双方 隊長一名、登攀隊長一名、隊員四名、合計六名の構成。報道関係は、当初より増えて、読売九名、NHK五名、中国三名の構成となった。

〔登山隊の組織〕：本会関係

◎登山委員会

顧問 桜内義雄、橋本龍太郎、早川種三、委員長 山田二郎、委員は、今西寿雄以下七名

◎実行委員会

委員長 村木潤次郎、副委員長 重恒夫、委員 藤平正夫以下八名、事務局 橋本清以下八名

◎募金委員会

委員長 今西寿雄、副委員長 山田二郎、藤平正夫、飯野亨、委員は村木潤次郎以下二十九名、他に名誉会員、評議員、理事、委員の諸氏にもお願いする予定。

なお、登山隊の総隊長として山田二郎、登山隊長として重広恒夫を選任、他の隊員については、兩人に一任することも併せて承認する。
二、平成三年度事業計画案(藤井)

三、平成三年度予算案(西村)

以上の二案については審議の後、それぞれ原案通り承認、本案を以て、文部省宛提出する。

四、報告事項

①NHK放送文化基金助成援助金として、ナムチャバルワ登山隊に対し四〇〇万円の助成を受けた。(山田)

②第二十七回秩父宮記念学術賞は、本会より推薦の山の気象研究会による『登山に関する気象学の研究』が受賞。授賞式が三月十三日、日本工業倶楽部で行われた。(村木)

③AACK、梅里雪山遭難者の合同葬儀の件、三月十七日、行われるが、本会より、山田会長、橋本評議員が出席の予定。

④日山協との合同委員会開催の件
二月十八日、遭対、自然保護に関する合同委員会を開催。席上両会の名で、登山者各位に呼びかける要望書が検討された。(『山』五四九号参照)

⑤ワールドカップ審判研修のため来日した中国登山協会刘火又常務委員以下五名の歓迎会を二月二十五日、私学会館にて実施した。

五、各委員会報告

・山岳研究所(石橋)
山研の設計担当として、溝口委員に加えて、小川武会員を委員として追加

したい旨提案あり、本件了承する。
・集会(入沢)
二月十六・十七日、黒斑山、二十二名参加。

指導者賠償責任保険は、四月が契約更改期にあたるので、参加者リストの提出と、リーダー名の変更届を行った。

・海外連絡(神崎)

HAT-Jは会員六〇〇名を越えた。募金委員会発足。六月二・九日、全国一斉に清掃登山を実施する。四月三日には、岡島成行氏を講師として自然保護の勉強会を行う予定。

・自然保護(松本)

二月二十三日、鳥海山の自然保護についての委員長名による要望書を、現地を訪問して八幡町長に提出した。

三月三日、両神山の北側地区で自然観察山行を実施した。

・総務(藤井)

三月十六日(土)オリエンテーション、四月十四日サクラハイイク、五月十八日土支部長・支部事務局担当者会議を行う予定。

・青年部(早坂)

中国ムスタング・アタ登山隊(隊長相馬勉)を派遣する。(バミール・キャンプの変更)……承認。

「登山装備管理規則」(案)により、装備の保管管理を行いたい旨の説明が

あった。

六、本日の入会承認 椿居義男氏他二十名。

・ルーム日誌

(2・3月)

4日	常務理事会
5日	財務委員会
6日	青年部、HAT-J委員会
12日	常務理事会、婦人懇談会
13日	自然保護委員会
14日	理事会、山研委員会
15日	「山岳史懇談会」
16日	ナムチャバルワ関係者会談
18日	日山協との遭対・自然保護会議
19日	資料委員会
20日	三水会、HAT-J委員会
21日	科学研究委員会
22日	図書委員会
25日	フィルム委員会、総務委員会
26日	自然保護委員会、スケッチ同好会
27日	アルペンスキー同好会
28日	山スキー準備会
4日	総務委員会
5日	婦人懇談会
6日	ナムチャバルワ実行委員会、山研委員会
7日	ナムチャバルワ偵察報告会、山スキー準備会

2月来室者420名

8日 自然保護委事務局会議

9日 会報委員会(増刊の件)

11日 常任評議員会、総務委員会

14日 理事会

15日 「山岳図書を語る夕」

18日 「三百名山」会議

19日 山スキー準備会

20日 三水会

25日 フィルム委員会

26日 自然保護委員会、婦人懇談会

27日 資料委員会、山研委員会

28日 常務理事、常任評議員会

3月来室者391名

……

……

……

……

初見一雄(名誉会員・一三九六)

三田幸夫(名誉会員・元会長・九二四)

笠原潤二郎(前岩手支部長・一〇三八)

桜井信雄(永年会員・一三〇五)

90・12・29

2・4

退会

横田敬一(二二二五)

(3月)

物故

跡部昌三(永年会員・一八四三)

2・27

齊藤啓助(二八六六)

矢野 真(五三九九)

加賀谷功(九七七二)

退会

奥津五郎(五五五六)

タンポチエ僧院再建協力

募金者ご芳名

一万円・尾崎徳郎。

四月一日現在累計四三六名、累計金額五、七六二、三四〇円。



☎ 3234-6659

この電話でもお知らせしています

●スケッチ同好会誕生

昨年九月の上高地山研における集会委員会主催のスケッチ山行の折、絵の好きな同志が集って、同好会として常時活動が続けたいと云う意見があり、去る二月二十六日山岳会ルームにおいて集会委のご協力を得て左記の如く発会致しました。絵に興味のある方の積極的な参加をお待ちしています。ご連絡下さい。

名称・アルパイン・スケッチ・クラブ
資格・山の絵を描きたい人。山の絵を

見て感動する人。日本山岳会々員およびその友人。

会費・年二千円(主に連絡通信費)

他の費用はその都度各自負担。年に数回のスケッチ山行と展覧会を実施する予定です。

幹事代表 斉藤幹雄

(☎〇四七一八五一三五四五)

●HAT-J 清掃登山へのお誘い

昨年十月十六日の発足以来、今年一月十三日にヒマラヤを汚染しないためのシンポジウム開催、四月三日に自然保護勉強会を開くなどの事業を展開してきたが、美しい山を守るために、実際に私たちが出来ることとして、「T A K E I N T A K E O U T」運動の一環として、まず日本の山に残されたゴミを清掃することから始めようということになりました。

そこでHAT-Jでは世界環境デーにちなんで六月二日(日)〜九日(日)を清掃週間と定め、各山岳団体に協力を呼びかけています。日本山岳会でも昭和五十一年から数年間にわたり、上高地、岳沢地区の清掃登山を実施しました。この復活ではありませんが、各支部にお願いして、各県岳連、勤労者山岳連盟の支部、H A Jの支部、その他の山岳団体グループと連絡をとりなが

ら、全国一斉に清掃登山を実施する予定です。HAT-Jの田部井代表は六月二日(日)の上高地でのウエスタン祭で講演することになっているため、上高地周辺の清掃を予定しており、最後の六月九日(日)は表丹沢で次の要項で清掃登山を実施しますので、是非参加して下さい。

期日 平成三年六月九日(月)

場所 表丹沢周辺

集合 一、表尾根周辺の参加者はヤビツ峠へ午前八時

二、大倉尾根水無川周辺の参加者は大倉バス停へ午前八時

装備 軽登山服装と装備、軍手、雨具

なお、ゴミ回収用袋は現地でお渡しします。雨天中止

なお、各支部のみな様には支部の事務局よりご連絡があると思いますが、お忙しい中の計画です。近所の山でけっこうです、自分達が出来る清掃登山をこの「清掃週間」の中で行っていたければ幸いです。

●山岳劇映画観賞会

日時 六月二十四日(月) 一八時三十分より二十時三十分

場所 集会室

題名 槍ヶ岳開山 他一本

会費 五〇〇円

当委員会では、思い出の山岳劇映画を今年度からフィルムが借りられ次第随時上映することにしました。今回は史実に基づき、槍ヶ岳を開山した播隆上人の生涯を描いたもの。

なお、フィルム委員会では委員として協力して下さい方を求めています。

●「雷」シンポジウムの開催

科学研究委員会

山での落雷事故の実態を知り、その対策を考えるため、講師の方々のお話をうかがい、どうしたらよいかを話し合いたいと思います。お誘い合せの上、多数ご参加下さい。

日時・七月六日(土)午後一〜五時

場所・青山学院大学、正面入った所に会場の案内板があります。

地下鉄 表参道、J R 渋谷駅下車七分

参加費・一〇〇〇円(予稿集代 他)

演題と講師 (司会) 中村純二

一、蓬峠の落雷事故(昭和四十三年六月二十三日)

二、ナングパルバット落雷事故報告

三、雷監視システム(LPATS)について

気象庁山岳部 岩淵茂雄

東京農大山岳部 小笠原岩雄

雷監視システム(LPATS)について

三、雷監視システム(LPATS)について

ウェザーニューズ社 上野悟
四、雷雲の予測についてー雷の起りやすい天気図と雲パターンー

日本気象協会 奥山 巖

五、山岳における落雷事故とその対策

中央防雷KK 北川信一郎

●自然保護全国集会

六月二十九日(土)〜三十日(日)

新潟県新発田市で開催

今年度の自然保護全国集会是、越後支部のご協力を得て、新潟県新発田市で二日間にわたって行ないます。

テーマは「日本山岳会としての自然保護の基本理念」ー山を大切にする登山について考えようーです。

二日目は現地視察として、つぎの二グループに分れ、越後の自然を探索する計画です。

(A) プナ林を鑑賞しながら湯の平温泉で一泊

(B) 焼峰山登山

集合 六月二十九日(土)

白新線 新発田駅改札口 正午

会場 新発田市民文化会館(車で送迎)

十三時〜十八時 全国集会

宿泊 「五十公野公園青年の家」および「ますがた荘」

会費 一万円(一泊三食、懇親会費、記念品代)

会費 一万円(一泊三食、懇親会費、記念品代)

会費 一万円(一泊三食、懇親会費、記念品代)

会費 一万円(一泊三食、懇親会費、記念品代)

会費 一万円(一泊三食、懇親会費、記念品代)

会費 一万円(一泊三食、懇親会費、記念品代)

会費 一万円(一泊三食、懇親会費、記念品代)

会費 一万円(一泊三食、懇親会費、記念品代)

会費 一万円(一泊三食、懇親会費、記念品代)

申し込み 宿泊予約のため一般、支部

会員とも六月十五日(土)までにハガキで事務局へ

自然保護に関心にある一般会員の参加をお待ちします。 自然保護委員会

●湿原と高山植物探索山行

科学研究委員会

期日 七月二十日(土)二十一日(日)

宿泊 湯の花温泉旅館清瀧

集合 東武鉄道会津高原駅 二十日十時半(または十六時)

場所 田代山、帝釈山など(二十一日)

費用 一万八千円、非会員は千円増

申込 葉書で日本山岳会科学研究委員会まで(会員番号、氏名、年齢、会津高原駅着時刻など記入)

申込締切 七月五日 参加者詳細通知

●『山』合本・製本します

会報五〇一号から五五〇号の合本をご希望の方は、該当会報現物に、製本代と梱包返送料計三五〇〇円を添えて一九九一年六月二十日までに日本山岳会事務局までお送り下さい。

なお会報合本四五一号〜五〇〇号(残部八冊)は送料とも八〇〇〇円、新しい五〇一号〜五五〇号合本は送料とも八五〇〇円にて販売いたします。

また会報バックナンバーは四五一号〜五五〇号のうち四五二、四五三、四六一、四六九、四九〇、五〇三、五〇四、五〇六、五〇七、五三八、五四〇号は欠。一部一五〇円です。

●カラコラム新地図発刊

会報五四〇号にてお知らせしましたSSAFの二十五万分之一地図見本が届きました。ご希望の方は代金・送料計四〇〇〇円を添えて日本山岳会事務局に六月二十日までにお送り下さい。

訂正 『山』二月号(五四八号)十五頁、新入会員上から三人目、小林晃氏の勤務先が信越印刷株式会社となっているのは信誠印刷株式会社が正しいので訂正致します。

平成三年五月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 山田二郎

編集代表 小倉厚

電話東京(326)四四三三

振替口座 東京三〇四八二九番

東京都港区赤坂一三ー六

赤坂グレースビル

印刷所 株式会社 技報堂